妹に婚約者を寝取られましたが、
未練とか全くないので出奔します

登場人物紹介
Characters
モモル・ナイデン
ナーナルの妹。
甘やかされて育ったため、
姉のナーナルなら
何でも言うことを
聞いてくれると
思っている。
デイル・
タスピール
ローマリアの皇帝。
元々は平民だったが、
商売で財を成した末に
自ら国を興した。
エレン・クノイル
ナーナルの執事。
家を出たナーナルを
優しく導く。
いつでも冷静だが、
時にはナーナルを
からかうことも。
ティリス・カロック
隣国・ローマリアを牛耳る
カロック商会の副商長。
エレンの幼なじみで、
二人の間には
因縁が……？
ロニカ・ルベニカ
元ローマリア三大商会の
一つ・ルベニカ商会の娘。
エレンのもう一人の
幼なじみで、
男勝り。
ナーナル・ナイデン
可愛がってきた妹に
婚約者を寝取られた男爵令嬢。
紅茶と読書を何よりも
愛しているのに、
娯楽の一つもない修道院に
入れられそうになって
出奔を決意する。

序章　告白

それは、いつもと変わらぬ日のこと。

「お姉様……あぁ、ナーナルお姉様。わたくしはとても酷(ひど)い妹です。だってそうでしょう？　お姉様の大切な婚約者のロイド様のことを……その、好きに……なってしまったのですから」

生まれてからずっと可愛がっていた妹のモモルが突然、胸の内を語り始めた。

わたしの婚約者――ロイド様と、体の関係を持ってしまったと。

「わたくし、この想いを打ち明けずにはいられませんでした……。ええ、分かっています。分かっていますわ。ロイド様がお姉様の婚約者だということぐらい、重々承知しています。ですが、お姉様が婚前交渉を拒んだことで、ロイド様がどれほど傷付いたか……ご存じですか？　ロイド様のお辛そうな表情を見ていると、可哀そうで可哀そうでたまらなくて……だからでしょうか、お姉様と正式に契(ちぎ)りを交わすまで、せめて妹であるわたくしが、ロイド様を癒(いや)す役目を担(にな)うことができればと思ってしまったのです」

何を言っているのだろう、と思った。

あまりにも唐突で、理解が追いつかなかったのかもしれない。

けれどもモモルは、わたしの顔を見ようともせず、ただただ悲しげな声色で言葉をぶつけてくる。
「あぁ、お姉様……わたくしはこれから先、どうすればよろしいのでしょう？　大好きなお姉様の婚約者に身を捧げ、挙句、この心までもロイド様の虜となってしまいました……。ロイド様も、わたくしと一緒にいるときの方が幸せだと仰っていましたわ。ですからその、わたくしが原因とはいえ、もはや……お姉様の入り込む余地はありません」
涙ながらにモモルが訴える。
自分も苦しいのだと言いたげな表情で。
「……ええ、分かっていますわ。こんなわたくしのことを、お姉様は決してお許しにはならないでしょう。ただ、たとえそうだとしても、わたくしはこの想いをなかったことにはできません。ロイド様のことが好きで好きで、たまらないのです……！　でも、もし真実をお父様とお母様にお伝えすれば、わたくしの大切なお姉様が、実の妹に婚約者を寝取られた哀れな子の烙印を押されてしまいますわ。わたくし、お姉様がそんな目に遭うだなんて、絶対に堪えられません……。ですからお願いします。もし妹のわたくしのことが本当に可愛いとお思いでしたら、お父様とお母様には秘密に……そして、わたくしが犯した小さな過ちを……どうか、見て見ぬ振りをしてはいただけないでしょうか？　わたくしの未来のために、ロイド様を解放してくださいませ……うっ、うぅっ」
モモルは、何よりも大切な妹だ。
その妹が、ロイド様を譲ってほしいと口にした。
元々、ロイド様との婚約は親同士が決めたものだ。彼とは、言葉を交わすことくらいはあったけれど、手を握ったこともなかった。
婚約者とはいえ、所詮その程度の関係だ。
だから、ロイド様に対する執着はこれっぽっちもない。
そんなことよりも、わたしはモモルに裏切られたことの方が悲しかった。
わたしが可愛がっていた妹は、いつの間にかわたしの知らない女に変貌してしまっていたらしい。
その変化に気が付くことができなかったのは、ロイド様との関係をそのままにしていたわたしにも責任がある。
だからかもしれない。
「……いいわ」
間を置いて口から出た言葉は、了承の一言。
嘘泣きを続けるモモルを前に、ぐちゃぐちゃになった心を落ち着かせるため、静かに声を震わせる。
「モモル、貴女の好きにしなさい」
そう。
わたしは、妹の願いを叶えることにした。

第一章　婚約破棄

ナーナルは、男爵位のナイデン家に生まれた。
十六歳の誕生日に、同じく男爵位を授かるエルバルド家の嫡男、ロイドと婚約した。それは貴族同士の繋がりを確かなものとするための、いわゆる政略結婚であった。
これは、貴族に生まれたからには避けては通れない道だ。
ナーナル自身も納得していたから、この婚約に対して否やはなかった。ただ一点の条件を除いては。
それは、婚前交渉はしないこと。
言葉を交わしたこともなく、今の今まで赤の他人であった男性に求められたとしても、はいそうですかと己の体を許すことなどできるはずがない。それは至極当然のことであり、エルバルド家にも納得してもらえるだろうとナーナルは考えていた。
そして順当に条件は認められ、ナーナルは正式にロイドの婚約者となった。だが同時に、ロイドとの間に大きな溝ができてしまった。
『なぜだ？　ぼくはきみの婚約者だぞ？　なのになぜ、婚前交渉を拒むんだ』
ロイドとの顔合わせの際、開口一番に言われた台詞がこれだ。

それ以外の楽しみなど他にはないと言わんばかりに、ロイドは嘆いてみせた。
『どうせ二年後には夫婦になるんだから別に構わないだろう？　それとも何か？　まだ学生だからとかしこまっているのか？　……ふんっ、今時の学生にとっては嗜みのようなものだ。それを拒むということは、ぼくに不満があるとしか思えないな』
ロイドの言う通り、確かにナーナルはまだ学生で、卒業は二年先だ。
だが、婚前交渉を拒むのはそれが理由ではない。
ナーナルは己の考えをロイドに話し、納得してもらおうとした。
だが結局、ロイドの不満が解消されることはなく、その日の二人は険悪なムードで別れた。
そのあとも、顔を合わせる度に、ナーナルとロイドは溝を深める。
ナイデン家のためにと、ナーナルはロイドとの距離を縮めようと試みたが、婚前交渉を拒まれたロイドの態度は冷たいままだった。
二人きりでデートをするときも、一切手を握ろうともしない。
ロイドの主張が正しいのか。自分が折れるしかないのか。わがままなのは自分の方なのか。
たとえそうだとしても、婚前交渉をしたいとは思えない。
そう葛藤すると同時に、不安が一つ。
今のまま結婚し、ロイドと二人で人生を歩むことになったとして、わたしは本当に幸せになれるのだろうか。
何度も会い、ロイドのことを知ろうと思えば思うほど、好意を持つことが難しくなっていく。

しかし、これは親同士が決めた婚約だ。ナーナルが断ることはできない。
そう考えると、ナーナルは日に日に次第に眉をしかめる回数が増えていった。
そんなある日のこと。
『あぁ、可哀そうなお姉様。今日はせっかくのロイド様とのデートなのに、熱で会いに行けないだなんて……』
ロイドとのデート当日、ナーナルは風邪を引いて寝込んでしまった。
ナーナルの姿を瞳に映し、まるで自分のことのように悲しむモモルに対し、ナーナルは弱々しく微笑んでみせる。
するとモモルは、ある提案を口にした。それは人助けならぬ、姉助けのつもりだったのだろうか。
『そうだわ！　今日はお姉様の代わりに、わたくしがロイド様とデートをして差し上げます！』

◇

その夜、ロイドとのデートを勝手に引き受けたモモルは、満面の笑みを浮かべながら帰宅した。
『聞いてください、お姉様！　ロイド様ったらね、わたくしに首飾りを買って下さったんですよ！』
そう言って、胸元に下がるピンクの宝石をナーナルへと見せる。
無邪気なモモルの姿を見て、ナーナルも複雑な気持ちを押し殺し、笑みを浮かべてみせた。
『ねえ、お姉様？　お姉様はロイド様からどんなプレゼントをもらいましたの？　ぜひわたくしにも見せてください！』
よほど嬉しかったのだろう。
首飾りの銀の鎖を両手で触りながら、モモルが問いかける。
『わたしは……、もらったことがないわ』
『えっ、一度も？　一度もですか？　……えっと、ご冗談ですよね？　お姉様はロイド様と婚約なさっているのに、そんなはずはありませんわ』
ロイドとの婚約が決まってしばらく経つが、ナーナルは一度もプレゼントをもらったことがない。婚前交渉を拒んだことが原因なのは明らかだが、それはナーナルにとって譲れないことなのだから、気にすることはなかった。
デートは、プレゼントをもらうためのものではない。ロイドとの仲を深めるためのものだ。
そう割り切っていたのだが……しかし今日、モモルはロイドからプレゼントをもらったと言うではないか。
ナーナルは、モモルが喜ぶ顔を見るのが大好きだ。とはいえ、このままではロイドに対する想いがさらに離れてしまいそうだ。
『うーん……お姉様、これはわたくしの勘ですけど、ロイド様は恐らくお姉様に振り向いてほしい一心で、ワザと意地悪をしているんです。ええ、きっとそうに違いありません！』
『ふふ、だといいけど』
モモルに気を遣われるなんて、と思い苦笑する。しかしまだ、ナーナルは気付いていなかった。

目の前で口早に語る妹が、既にロイドと体の関係を持ってしまったということに。
『――ところでお姉様。ロイド様のお部屋に入られたことはありますか？　……え？　ないんですか？　ロイド様の婚約者なのに？』
休む間もなく、次から次に投げかけられるモモルの容赦ない言葉に、ナーナルはぎこちなく笑みを浮かべる。それが精一杯だ。それでもモモルは、ロイドの話を止めようとはしない。
たった一日。
この日を境に、モモルは人が変わったかのように、ロイドの話をするようになる。
そして二人が婚約してから、二つ歳を重ねた頃……
学園の卒業と、ロイドとの結婚。その二つを間近に控え、忙しない日々を送るナーナルのもとに、モモルが顔を見せた。
それからすぐに、あの台詞を口にしてみせる。
『お姉様……あぁ、ナーナルお姉様。わたくしはとても酷い妹です。だってそうでしょう？　お姉様の大切な婚約者のロイド様のことを……その、好きに……なってしまったのですから』

◇

モモルの懺悔を耳にしてから、半時足らず。
まず初めにしたことといえば、両親への口添えだ。ロイドと自分の婚約を破棄し、己の代わりを

モモルに託すと伝えた。
ロイドにはモモルの方がお似合いだからと。それ以外の理由は一切説明せず、頑なナーナルを前に、父――ベルギスと、母――ホロワは頭を抱えた。
それは、モモルのためなのか。
モモルがロイドと結婚し、幸せに暮らすための行動か。
もちろん、違う。
妹のモモルと、婚約者のロイド。
二人の裏切りに遭ったナーナルは、既に彼らから興味を失っていた。
口にこそ出さなかったが、ナーナルは心中でモモルに対し「お好きにどうぞ」と返事をしていた。
その台詞は、決して負け惜しみではなく、本心から出たものだ。
そして今、ナーナルの考えていることは、ただ一つ。
今後どうやって生きていくのか。それだけだった。
婚約相手の変更などという不祥事でナイデンとエルバルド両家の顔に泥を塗り、今までと同じようにナイデン家に居座り続けることは困難だ。
たとえ許されたとしても、そのままではモモルとロイドの姿を度々視界に映すことになる。それはそれで面倒であり、居心地が悪い。
だとすれば、答えは一つ。
ナーナルがナイデン家を出て行けばいい。

貴族の地位はなくなり、不自由のない生活を手放すことにはなるが、同時に自由を手にすることができる。そう考えていたのだが、事はそう簡単には運ばなかった。
まずはホロワから罵声を浴びせられた。親不孝者め、恥を知れと。
次いでベルギスからは、ナイデン家とエルバルド家、両家の名に傷を付けた責任を取るため、修道院に入るように命じられた。同時に、卒業間近の学園を去れとも。
王都の外れにある修道院にはナーナルもこれまでに何度か足を運ぶ機会があったが、そこは牢獄のような場所だった。一切の娯楽は持ち込めず、毎日毎日決められた時間に決められたことをするだけ。想像するだけでぞっとする。
もし、そこで一生を過ごすことになれば、ナーナルはあまりの詰まらなさに死んでしまうだろう。唯一の趣味である本とお茶を手にすることも叶わないのだから当然だ。
とりあえずは頷き、ナーナルはベルギスに従う素振りを見せた。
だが、その心は穏やかとはいえない。
ナーナルが一方的に婚約を拒否しているのだから、確かにそうなるのが筋かもしれない。しかしながら事実は異なり、この件において本当に悪いのはモモルとロイドなのだ。ナーナルは被害者といえるだろう。
それなのに牢獄に入れだなんて、堪ったものではない。
だが、たとえそうだとしても、ナーナルは好きでもない男と結ばれるぐらいなら死んだ方がマシだ。モモルのおかげで己の想いを再確認することができたナーナルは、政略結婚の道具としての役

割を果たせなかったことにむしろ安堵していた。
では、どうするのか。
籠の中の鳥として一生を終える運命ならば、いっその事、行方をくらませてしまおうか。
頭の中で想像し、ナーナルは即断する。
そうしよう、父の命に従う必要はない。
モモルの願いを叶えてロイドは譲るが、それ以上の尻拭いをするつもりはない。
どこか遠く離れた場所へ行っても構わないだろう。
「……はぁ、困ったものね」
しかし、実際に色々と思い描いてみても、現実はそう甘くはない。
ナイデン家の名の下に生きてきたナーナルは、王都から一度も外に出たことがなかった。
ただの一度も働いたことがなければ、そもそも一人で暮らしたこともない。手元にある貴金属をお金に換えればしばらく生活には困らないだろうが、その先はどうすればいいのか。
修道院に入る準備の振りをして、己の荷物を最低限にまとめ上げる。
あとは行き先を決めるだけなのに、たったそれだけのことがナーナルにとっては未知の世界であり、困難な壁として立ちはだかっていた。だが、その表情はどことなく楽しそうだ。
と、そんなときだった。
――トントントン。
「お嬢様、何をお悩みですか」

軽い打音に続いて、扉の向こうから、懐かしい声がナーナルの耳へと届いた。

◇

ナーナルとモモルには、それぞれ専属の執事が付いていた。
ナーナルの専属執事の名はエレン。とある事情により、数年前まで仮の専属執事としてナーナルの遊び相手を務めながら、王都の執事学校へ通っていた。
そこを首席、それも飛び級で卒業したことで、エレンは各貴族の家から引く手あまたとなる。
しかし本人たっての希望で、エレンは引き続きナイデン家の世話になり、ナーナルの専属執事として正式に雇われることを選んだ。
専属執事としてのエレンは、常にナーナルの傍にいた。ナーナルもエレンには心を許しており、他愛もない話から行きつけの喫茶店への付き添い役、書店に使いに出したり、大事な相談をしてみたりと、エレンと言葉を交わさない日はなかった。
その日常が壊れたのは、ナーナルが十六歳の誕生日を迎え、ロイドとの婚約が正式に決まった日のことだ。エレンはその日、ベルギスから新たな命を受けた。
今後はベルギスの専属執事として務めること。
ナーナルとエレンは察した。
任を解かれた理由は言わずもがな、ロイド直々の願いだからだろう。たとえそれが執事であろう

とも、年頃の男が婚約者の傍を離れないというのは、ロイドとしては全く面白くない話だ。
故にロイドはナイデン家に訴え、ベルギスがそれを承諾した。
それからは、ナーナルとエレンが言葉を交わす一切の機会が失われ、その声色も忘れかけていた。
「……久しぶりにエレンの声を聞いた気がするわ」
「二年振りですからね。私の名前を覚えていてくださり、光栄です」
冗談を口にし、けれども優しく笑うエレンと目を合わせ、ナーナルは頬を緩めた。
「エレン。わたしね、婚約を破棄したの」
「存じております」
「それでね、困ったことにお父様から修道院に入れと言われたわ」
「そちらも同じく。しかしお嬢様のことです、それは断るおつもりですよね」
鋭い。ナーナルは肩を竦めた。
二年前に任を解かれたとはいえ、エレンはナーナルの元専属執事だ。目線や仕草、声色だけで、ナーナルが何を求めているのか見抜いてしまう。
そしてそれは、ナーナルがベルギスの命に従うつもりがないということも然り。
二年前は片時も傍を離れなかったエレンが、今再び自分の傍にいる。そして話し相手になってくれている。たったそれだけのことが、今のナーナルにはありがたかった。
「悩みの種は、すべてですね？」
すべて、とエレンが問う。何が原因なのかを考える段階は、既に過ぎている。

「……エレン。わたしは間違ったことをしたと思う？」
「いえ、全く」
問いかけると、エレンは即答した。その声と反応が心地よく、ナーナルは口の端を上げる。そしてナーナルの反応も、エレンが期待したものと同じだ。
「それなら、どうしてわたしは今、こんなにも困っているのかしら？」
「お嬢様がそれを望んだからでは？」
「っ、……ふふ、おかしなことを言うのね」
「理由は二つございます。一つは、お嬢様が笑っておられること」
どうしてエレンは、そう思ったのか。理由は二つあった。
「私が知るお嬢様は、強気な方です。妹のモモル様には甘いものの、その他の点に関しては自ら率先して行動し、常に最良の結果を残されています。そんなお嬢様が、口では困ったものだと言いつつも、実際には微笑んでいらっしゃる。つまりお嬢様は、今この瞬間を、心の中では楽しまれているということになります。そして二つ目は……」
「もういいわ」
それ以上の説明は不要だ。ナーナルは両手を挙げ、降参してみせる。
先に述べたとおり、ナーナルのことであれば、エレンは何でもお見通しのようだ。
「二つ目がまだですが？」
「これ以上わたしに恥をかかせないで」

「かしこまりました」
エレンは口を閉じ、首を垂れる。
その姿を見たナーナルは、ふう、と一息吐いた。
「エレン。これはわたしの独り言だから、判断は貴方に任せるわ」
きっと、初めから決めていたのだろう。
エレンが来れば今のように、そうでなければ会いに行く。
そしてその手を強引に掴み取って道連れにする。もちろん、エレンに拒否権はない。
実に自分勝手な性格だと自嘲するが、ナーナルはそう思われても構わなかった。
「籠の中の鳥をね、連れ出してほしいの」
外へ逃がすのではなく、連れ出す。ナーナルはそう言った。
そしてエレンは小さく頷き、返事をする。
「お任せください。必ずや籠の中の鳥を連れ出してみせましょう」

◇

ナーナルとエレンが二年振りに言葉を交わしてから、一度目の日が昇る。
朝食の席には、既にベルギスとモモルの姿があった。そこにナーナルとエレンが姿を見せる。
「お父様、モモル、御機嫌よう」

「あら、お姉様！　御機嫌よう！」
「……昨日の今日で、よくも顔を出せたものだな」
元気よく答えるモモルとは対照的に、ベルギスは険しい表情を浮かべている。
「それだけが、わたしの取り柄ですので」
「ちっ、厚顔無恥が。そんなものは取り柄とは言わん」
すっきりした表情のナーナルに目を向け、舌打ちを一つ。
それも束の間、ベルギスは視線を横へと移した。
「ところで、なぜお前がそこにいる」
言葉をぶつける相手は、エレンだ。
エレンはベルギスの専属執事なのだから、その疑問も当然と言える。
「お嬢様が修道院にお入りになると小耳に挟みまして、僭越ながらそのときまでお世話をしたいと思った次第です」
「不要だ。お前は私の執事なのだから――」
「その件ですが、実は本日限りでお暇をいただきたく存じます」
ベルギスの言葉を遮るように、エレンが告げる。
「何だと……？」
「元々、私はお嬢様の専属執事として雇われていました。その任を解かれて以降も、復職する機会を夢見て務めて参りましたが……それが叶わぬ夢となることを知りましたので」

ナーナルのいないナイデン家には、もはや用はない。エレンはそう言っている。
「……貴様、私が主では不服か」
「どうぞご自由に解釈なさってください」
「ふん、ならば今すぐ出ていけ。貴様を雇うのは、もう止めだ」
「そうさせていただきます。この瞬間より、私の主はナーナル様です」
「っ、どの口が……」
「いいじゃないですか、お父様。きっとお姉様が望んだことなのでしょうし、わたくしはお姉様とエレンの意思を尊重したいと思います」
「モモル、しかしだな……」
「それにわたくし、今日はとっても忙しいのです。学園終わりに先方にお邪魔して、お姉様がロイド様との婚約を破棄する旨をお伝えし、わたくしが代役を果たす許可を得なければなりません。ですから、些細なことに構ってなどいられませんわ。その代わりと言ってはなんですけど、エレンはお姉様が修道院に入る姿をしっかりと見届けてください。それでこのお話はお終いです。ふふっ」
意地悪そうな笑みを浮かべ、モモルは食事を再開する。
そんなモモルに対し、ナーナルが口を開く。
「モモル、今日も一緒に登校してくれるかしら」
「？　ええ、当然ですわ。だってわたくしたちは仲良し姉妹ですもの。お姉様が修道院に入るまでは、ずっと一緒に居ますわ」

「そうよね、わたしたちは仲良し姉妹だものね」
心にもないことを口にするモモルと、冷めた目を向けるナーナルは、傍から見れば仲良し姉妹なのかもしれない。
だがそれもここまでだ。
モモルはまだ、ナーナルとエレンの企みに気付いていなかった。

◇

朝食を終え、学園に着いた三人。
ナーナルは「用があるの」と言い、モモルの手を引いて真っ直ぐに職員室へ向かった。
そこで挨拶を一つ、続けて一言、
「皆様、御機嫌よう。突然ではございますが、本日をもって自主退学させていただきます」
ナーナルの声が職員室に響いた。
一瞬の静寂のあと、驚愕に満ちた声で職員室が埋まる。
「は……、えっ？　今言うんですか？」
驚いたのはモモルも同じだ。
隣に立つナーナルの顔を見上げ、ぽかんと口を開けている。
学園に着いて早々、自主退学を申し出る。

それはまあいいとして、なぜわたくしまで連れてきたのか。
突飛な行動にモモルは驚きを隠せないが、まだ終わらない。
「ナーナル君、今言ったことは……事実なのか？」
教師が一人、疑問を口にする。
爵位こそ低いが、ナーナルは優秀な生徒だ。教師陣や学友からの評判も良く、誰からも好かれる存在として認識されていた。
そのナーナルが、急に退学すると申し出たのだ。嘘だと思いたいのか、事実を確かめようと試みる。しかし、
「ええ、事実です」
ナーナルはあっさりと肯定する。
教師陣と職員室に居合わせた生徒たちは、その言葉にため息を吐く。
「一体、なぜ……理由を聞かせてくれ」
「実はわたし、婚約を破棄しようと思いまして」
「は？」
その台詞に、全員が目を丸くする。
「ここにいる妹のモモルが、どうしてもわたしの婚約者であるロイド・エルバルド様を譲ってほしいと言うので、その願いを叶えることにしました」
「ちょ、おねっ、お姉様⁉　急に何を――」

「本当のことを言いますと、わたしは婚約を破棄するつもりはございませんでした……。ですが、モモルとロイド様が共に一夜を過ごした仲と知り、わたしには二人の愛を止めることはできないと悟り、諦めることといたしました」
「――ッ‼」
それをここで言うのか！　モモルは心の中で絶叫した。
「お姉様ッ、二人だけの秘密だと言いましたよね？　約束は守ってくださらないと困りますわ！」
小声で訴えるモモルに、ナーナルは優しく笑う。
「二人だけの秘密……？　いいえ、そんな約束は一度もしていないわ。貴女とわたしがした約束は、お父様とお母様に秘密にすることだけ……そうでしょう、モモル？」
「ッ、ううっ、そんなこと……ッ‼」
周囲がざわつく。
職員室のどよめきに興味を引かれた生徒が次々と集まってくる。
何の騒ぎだと耳を傾け、徐々に知っていく。
ナーナル・ナイデンが、妹のモモルに婚約者を寝取られたことを。
「お、お姉様……これはお姉様の恥になりますわ。妹のわたくしに負けた女として一生を過ごすことになってもいいんですか？　今ならまだ撤回できます、早く冗談だと言ってください！」
「あら、おかしなことを心配するのね？　わたしは修道院に入るのよ？　王都中の人たちがわたしを馬鹿にしようとも、その声がわたしの耳に届くことはないと思うのだけれど、違うかしら？」

「っっ」
違わない。
王都の修道院は、一度入れば二度と出てくることができないと言われている。そんな場所に入る姉と比べれば、王都中の人たちから馬鹿にされる方がまだいいだろう。
そう考え、モモルは気を取り直す。
反撃は想定外の事態であったが、ロイドを寝取り、姉を修道院送りにすることができたのだ。これ以上の成果はないといえる。
「それでは皆様、わたしは家へ戻ろうと思いますので、そろそろ失礼いたします」
「家に……って、お姉様？　ここまで来たのに、もう戻るのですか？」
「ええ。伝えるべきことはすべて伝えたわ。あとは身支度をするだけよ」
自主退学するのだから、これ以上学園に留まる意味はない。
確かにその通りなのだが、モモルは何か腑に落ちなかった。
「モモル、わたしの分までしっかりね？」
けれどもナーナルは、モモルに考える隙を与えない。
「も、もちろんですわ。お姉様に言われるまでもありませんから」
もういい。ナーナルがいる限り、騒ぎは大きくなり続ける。早く帰ってくれた方が自分のためだ。
その結果、モモルは二人の背を見送り、事態の収束を図るのであった。

◇

朝の学園での一騒動から、半日が過ぎた。
既に日は落ち、王都には夜の帳が下りている。
そんな中、規則正しい馬の蹄の音が響く。と同時に、白い息が二つ交じり合う。
「――ここまで来れば、安心かと」
エレンが籠の中の鳥を連れ出してからしばらく、その姿は王都の外にあった。
手綱を緩め、馬上から来た道を振り返ってみるが、そこには何もない。王都は、既に目に見える距離ではなくなっていた。
「結構、走ったわね」
背をエレンに預けたまま、ナーナルが呟く。
「お嬢様は確か、王都から出るのは初めてでしたね」
「ええ、ずっと夢見ていたわ……。いつの日か、外の世界をこの目に映したいって」
エレンの声に、ナーナルが頷く。それは他愛もない話の一つだ。
ナーナルが外の世界に憧れを抱いたのは、エレンがまだ専属執事だった頃のこと。暇さえあれば、外の世界の話や物語をおねだりしたものだ。その経験が今のナーナルを作り上げていた。
「いかがですか」
エレンが感想を求める。

だが、ナーナルは首を横に振り、小さく笑った。
「外の世界は広いのでしょう？　まだ何も言えないわ」
家に戻ったあと、ナーナルは修道院に入る振りを続け、身支度を整えていった。
準備ができたらそのまま、両親とモモルには何も伝えずにエレンと二人で馬に跨り、家を抜け出したのだ。
その際、ナーナルは手持ちの貴金属をお金に換えようと思っていたが、残念ながら時間が足りず、そこまではできなかった。
とはいえ、旅の資金は問題ないとエレンが言う。ナイデン家に勤めていた頃に貯めたお金があるから、ナーナルが心配することはないのだと。
もちろん、それでも困ることがあれば、改めて換金すればいい。
故に、金銭面での不安はなかった。
「そういえば、結局行き先をまだ決めていなかったわね……。エレン、どこかおすすめはある？」
「国内では旦那様に見つかり連れ戻される恐れがございますので、隣国まで行くのがよろしいかと」
「隣国……確かローマリアだったかしら」
「はい。商人が治める豊かな国であり、私の故郷でもございます」
「えっ、エレンってローマリアの出身なの？　今初めて知ったわ」
王都の出だとばかり思っていたが、どうやら違っていたらしい。

どうして話してくれなかったの、とナーナルは少しだけ頬を膨らませる。
「まあいいわ。それなら行き先はローマリアにしましょう。着いたら案内してくれる？」
「もちろんです。……ただ、ローマリアに到着後で構いませんので、私からも一つお願いしたいことがございます」
「珍しいわね、エレンがお願いごとだなんて」
隣国に着いてからも、エレンはナーナルの傍にいるつもりだ。
主に言われたからとはいえ、王都の外までついてくる必要など本当はない。
けれどもエレンは、あえてその道を歩むことを決めた。それは心に秘めた想いがあったからだ。
「そのお願いは、わたしが叶えてあげられるようなことなの？」
「……非常に困難ですが、恐らくは」
「あいまいな答えね……でも、エレンはわたしならできると思っているのね？」
そう聞くと、エレンは頷いた。
それを見て、ナーナルはさらに続ける。
「それなら、迷わずわたしを信じなさい。貴方の願いが何なのかは知らないけれど、絶対に叶えてあげるから」
「頼もしいお言葉です」
力強い返事に、エレンは口元を緩める。
それを見たナーナルも、柔らかな笑みを浮かべた。

「エレン。これから貴方とわたしは、一心同体よ。だから何があっても離れたらダメ。いいわね？」
「それは命令ですか」
「違うわ。これもわたしのお願いの一つ。だから聞いてちょうだい」
「そういうことであれば、喜んで」
命令よりも、お願いの方がいい。エレンはしっかりと頷いた。
「ところで……本当に後悔してない？　わたしについて来なければ今も――」
「お嬢様の傍にいられることは、私にとってはこの上ない喜びです」
その言葉に、ナーナルはさらに頬を緩める。
今後は普通に暮らすこともままならないかもしれないが、ナーナルは一人ではない。
それがとても心強かった。
「頼りにしているわ、エレン」

第二章　外の世界

その日は、森を越えた先の村で一夜を明かすことにした。
「……ねえ、エレン。馬鹿にされても構わないから、言いたいことがあるのだけれど」
村に入ると、辺りを歩く住民の姿を眺める。
どこでも見られるような当たり前の光景を前に、ナーナルの胸は高鳴っていた。
「王都以外にも人がいるのね」
当然のことと頭では理解していながらも、口にせずにはいられない。
王都の外に出る必要も理由もなかったナーナルだから、それも仕方のないことだ。
「私も、元は王都の外の人間です。その世界を楽しんでいただけたのであれば光栄です」
ナーナルの抱いた感想を、エレンは馬鹿になどしない。するはずがない。
エレンは何があろうともナーナルの味方なのだ。
「あ、……えっと、このあとはどうすればいいのかしら」
一先ず、村に入ることはできた。
しかしこのあと、何をすべきなのか、箱入りのナーナルには分からない。
「ご安心ください」

何をすればとナーナルが迷っている間に、エレンは宿の手配を済ませてしまう。
この村を訪ねる旅行者や行商人は思いのほか多く、幸いにも二人を怪しむ者はいなかった。

◇

「部屋はこちらのようですね」
宿の亭主から鍵を受け取り、ナーナルとエレンは部屋へ向かう。空きがなかったので、取った部屋は一つだ。
鍵を開け、室内に入ってみる。簡素な作りだが、寝泊まりするには十分だった。
ただし、問題が一つ。
「……エレン、ベッドが足りないわね」
見たところ、室内にはベッドが一つしかない。
「そのようで」
「その様子だと、まさか知っていたの？」
問うと、エレンは素直に頷く。
「私はお嬢様の執事です。その身をお守りする役目がございますので、ベッドは必要ありません」
ベッドで眠るのはナーナルで、エレンはその身を扉の前で守る。
執事たるエレンの中では、その構図が出来上がっていた。

「はぁ……。エレン、貴方はわたしの従者ではないのよ？　それに、今は執事でもないわ」
「いえ、それは間違いです。今朝、お嬢様に再雇用されたと記憶しております」
その台詞を耳にして、ナーナルは大きなため息を吐く。
ここはナイデン家ではない。本来なら家を出た時点で、主従関係は切れている。
それでもかしこまるエレンの手を、ナーナルは思い切って掴んだ。
「お嬢様？」
「その呼び方はやめて。これからはナーナルと呼んでほしいの」
「ですが」
珍しく、エレンの目が泳ぐ。
それが面白かったのか、ナーナルは意地悪そうに笑った。
「ソファがあるでしょう？　わたしがそこで眠るから、エレンはベッドで寝てちょうだい」
「お嬢様がソファで眠るなど、とんでもございません」
「だったら、わたしと一緒に寝る？」
いつもは、エレンに冗談を言われる側だった。
だからこんなときぐらい、仕返しをしてもいいだろうと思ったのだ。
「……そう、ですね。……ではお言葉に甘えて」
「うん、うん……え？　……へっ？」
「今宵は、お嬢様と……いえ、ナーナル様と、ご一緒させていただきます」

「――ッ!?」
まさか、真に受けたのか。
ナーナルは目を見開き、慌ててエレンの顔を見る。すると、
「冗談ですよ？」
泳いでいたはずのエレンの目は、いつの間にか元に戻っていた。
つまり、結局のところ。
「ッ、……エ、エレン。貴方って人は、本当にもう……ッ」
ナーナルはまたしても、からかわれてしまったということだ。

◇

ひと悶着あったが、結局はエレンはソファで眠ることが決まった。本人は最後まで拒んでいたが、ナーナルに押し切られた形である。
からかったことを申し訳ないと思うのであれば、この条件を呑みなさい。
そう言われてしまっては、さすがに断りようがない。ナーナルにとっては、痛み分けといったところだろうか。
そして今、二人は宿の外に出て、村を散策中だ。王都とは比べ物にならないが、それなりに賑わっている。旅行者や行商人向けの屋台や露店がいくつか並んでおり、眺めるだけでも楽しい。

「あれはなに？　――あっ、そっちのお店に並んでいるものは？」
王都にいた頃、ナーナルは家と学園を往復するだけの毎日を送っていた。
学園では学友と共に勉学に励み、家に戻ってからは復習と予習、さらには礼儀作法などを学んだ。
夕食が終わると、ようやく自分の時間を作ることができるが、本を読んだりお茶を淹れたりすることぐらいしかできなかった。
だが、詰まらないと感じたことはない。自分の好きなことや、好きなもののために、時間を費やす。それがナーナルにとっての贅沢であり、癒しなのだ。
そんな毎日の中で特に心をくすぐられていたのは、学園にある図書館だった。
図書館には数多の物語が存在し、出番を待ち侘びているのだ。心が躍らないはずがない。
外の世界に興味を持ってからというもの、ナーナルはずっとそうだった。
「ナーナル様、少し落ち着きましょう。そんなに急がなくともお店は逃げたりしませんよ」
「分かっているわ。でもね、こういうところは初めてで……」
王都の外の世界は、自分にとって本の中の世界と同じだ。今、自分はその中にいる。
だから、ナーナルは図書館にいるときと同じように、夢中になっていた。

◇

「……エレン、これがほしいのだけれど……お金はある？」

しばらく歩き、ナーナルは古書を扱うお店の前で立ち止まった。
積み上げられた本を手に取り、題名を確認する。王都にいた頃は、限られた時間の中で面白そうなものを見繕う必要があったから、じっくりと選ぶことができなかった。
しかし今は違う。
エレンと共に家を出てから、ナーナルは自分のための時間を生きている。
「もちろんです。……その本に決めてしまって良いのですか？　まだ時間はございますので、ごゆるりとお選びください」
「ありがとう、エレン」
エレンの心遣いが嬉しくて、ついつい口元が緩む。
それなら、ここにあるすべての本を吟味しよう。ナーナルは気合を入れた。
「ただし、この時期はまだ冷え込みます。文字が見えなくなるまでにはお決めください」
「善処するわ」
「善処ですか……参りましたね」
季節は間もなく春を迎える。肌を突き刺すような寒さを感じることは少なくなったが、夜の間は息が白くなるので、まだ油断は禁物だ。
しかしながら、ナーナルの勢いは止まりそうにない。
両の瞳を輝かせ、本の頁を捲るナーナルの背に、エレンは己のローブを羽織らせる。
「……エレン？　これでは貴方が風邪を引いてしまうじゃない」

「そう思うのでしたら、善処、ではなくできるだけ早くお決めください」
「ふふ、考えておくわ」
少しだけ意地悪そうに笑みを浮かべ、ナーナルは再び本の虫となる。
その姿を後ろから見守り、エレンもまた頬を緩めるのだった。

◇

結局、ナーナルは一冊しか買わなかった。
「本当に、それだけでよろしかったのですか？」
「わたしたちは旅行者……いいえ、逃亡者よ。荷物が多いのは困るでしょう？」
この村に、二人が根を下ろすことはない。
ここは中継地点であり、二人の旅は始まったばかりなのだ。
「それにね、一度読み終えても、また読み返せばいいわ。この本が綴る物語は、いつでもわたしのことを待っていてくれるもの」
エレンのお金だからと、遠慮したわけではない。
ナーナルには自分の考えがあり、数多くの本の中からそれを選んだのだ。
「一度読了したら、飽きてしまいませんか」
「二度目には二度目の発見があるものよ。もちろん、三度目にも、ね？」

ナーナルにとって『本』とは生活の一部であり、己を楽しませてくれる特別な存在だ。
それも一度だけではなく、何度でも。
「さあ、帰りましょう？」
本を抱えたまま、ナーナルは借りていたローブを脱ぎ、エレンに羽織らせる。
食事は宿の中で済ませることができるので、これで村の散策はお終いだ。明朝にはここを発ち、次なる中継地点を目指すことになる。
遅くなる前に、二人は宿へと戻ることにした。
「時が経つのは、あっという間ね」
空を見上げ、ナーナルが口を開く。
「今頃、あちらは大騒ぎかしら……」
ロイドとの婚約を破棄し、真実を学園でぶちまけ、挙句の果てには父の命に背いて行方をくらませたのだ。騒ぎにならないはずがない。
「そうですね……仮に、まだ私がナイデン家にいたのであれば、今頃血眼でナーナル様のお姿を捜しているでしょう」
「エレンのそういうところ、好きよ」
何気ない言葉の一つに、エレンの肩が僅かに揺れる。
だが残念ながら、ナーナルがそれに気付くことはなかった。

◇

宿に戻って食事を済ませた二人は、部屋で言葉を交わし合う。
それは空白の期間を少しずつ埋めていくための、大切なひと時だ。
主と執事だった、あの頃のように。
「――そろそろ、お休みになりますか」
今日は長い時間、馬を走らせ、村についてからもお店巡りをした。
その結果、知らず知らずのうちに疲れが溜まっていたのだろう。ナーナルの瞼は重くなっていた。
「……ええ、そうしようかしら」
ふわぁ、とあくびを一つ。
明日も早い。二人並んでソファに座って語り合うのは、次にしよう。
「さあ、ナーナル様。そろそろベッドに……」
エレンがソファから腰を上げ、ナーナルに声をかける。
すると、ナーナルがエレンの手を取った。
「……もう少しだけ、ここに座っていてもいい？」
「ソファは私の寝場所ですが」
「分かっているわ。だからわたしが眠るまでの間でいいから、お願い」
ナーナルの寝場所はベッドだ。けれどももう少しだけ、ナーナルはエレンの傍にいたかった。

「ではせめて、風邪を引かないようにいたしましょう」
ナーナルの手を放し、エレンはベッドの上から毛布を取る。
ソファに戻り、ナーナルの隣に座ると、二人で毛布に包まった。
「なんだか、遊んでいるみたいね」
くすっと笑い、ナーナルはエレンに寄りかかる。そして瞳を閉じた。
「……感謝しているわ、エレン」
ぽつりと、想いの丈をこぼす。
その何気ない台詞の中には、言い表せないほどの想いが込められている。
エレンがいるから、自分はここにいる。
希望を持ち、歩みを進めることができている。
「それは私の台詞ですよ」
そしてエレンもまた同じく、ナーナルへの言葉にできない想いを胸の内に抱えている。
「貴女が見つけてくれたから、私は今ここに……」
隣に座り、眠りに落ちるナーナルに向けて。
聞こえていないことを確認したうえで、エレンは優しく微笑んでみせる。
伝えることができる日が来るか否か、まだ分からない。
たとえ来なかったとしても、傍に居続け、守り抜いてみせる。そう誓った。
「おやすみなさい、ナーナル様」

執事に身を任せ、主は舟をこぐ。
そんな主の傍で幸せを噛み締めながら、執事はその安らかな寝顔を見守り続けた。

◇

瞼の裏に、ナーナルは薄らと日の輝きを感じ取る。夜が明けたのだろう。
「……んぅ」
起きなければと、身を捩る。
しかし狭い場所にいるのか、上手く体勢を変えることができない。
「お目覚めですか？」
不思議に思っていると、すぐ近くからエレンの声が聞こえた。
まだすっきりしない頭を振って、ナーナルは瞼を開けてみる。すると、
「……エレ……ン？」
目の前に、エレンの顔があった。
「――ッ!?」
ここでようやく、ナーナルは思い出した。
昨晩、眠りに落ちるまでの間、自分はエレンと二人でソファに座っていたはずだ。
だが、なんだこの状況はと目を動かす。

寝落ちしたのは理解できる。
ではなぜ、エレンに『膝枕』されているのか。
「ご、ごめんなさ……っ」
飛び起きたナーナルは、エレンの傍から離れる。
余りの衝撃に心臓が高鳴り、全く落ち着かない。
「？　何を謝られているのですか」
けれどもエレンは、いつもと変わらぬ表情を浮かべている。
年頃の乙女に膝枕をしていたくせに、その余裕はどこから出てくるのか。
「ッ、……ううっ、なんでもないわ！」
怒りをぶつけるわけにもいかず、ナーナルは悔しそうに目を逸らす。
恐らくエレンは、ソファで眠ってしまった自分を起こさないように、その身を犠牲に枕役を果たしてくれたのだろう。だとすれば、きっと彼は十分な睡眠を取ることもできなかったはずだ。
逸らした視線をゆっくりと戻し、ナーナルは再びエレンと目を合わせる。
「……エレン、貴方は眠れたの？」
「いえ、残念ながら全く」
「――ッ!!　やっぱり……」
「ナーナル様の寝顔を見ていると、眠気など吹き飛んでしまいますので」
「そう、それは本当に申し訳ないことを――って、そっち!?　それが原因なの!?」

訊ねると、エレンは意地悪そうに口角を上げた。
ナーナルは、またしてもからかわれたのだ。
「……もうっ、心配させるような冗談は禁止よ、いいわね！」
「かしこまりました。それでは間もなく朝食の時間となりますので、私は部屋の外で待機いたします。準備が整いましたらお知らせください」
一礼し、エレンが部屋の外へ出た。扉一つ隔てて、エレンはナーナルが身支度するのを待つ。
その一方で、部屋に残されたナーナルは上気した頬を両手で覆う。
「ひ、……ひざ、まくら……エレンに、膝枕されていただなんて……ッ」
身悶えし、ソファの上で丸くなる。
ナーナルは恥ずかしくて一歩も動けない。
しかしエレンを待たせているのだから、早く支度をしなければならない。
無理矢理に羞恥心を胸の奥に押し隠すと、ナーナルは手早く身支度して息を整える。
そして部屋の外に出て、エレンと二人で朝食を取りに向かった。

◇

朝食を終えてから、数時間が過ぎた。
村を訪れていた行商隊の隊長と交渉し、二人は彼らの馬車に相乗りさせてもらうことになった。

次なる中継地点に着いたら、村まで駆けてきた馬を対価に渡すのが条件だ。
これはベルギスやモモル、さらにはロイドが二人の行方を捜すのを見越し、村で手放すよりも足がつきにくいと判断したからだ。
「……あぁ。この村とも、そろそろお別れね」
出発前、ナーナルは再び古書を扱うお店に顔を出す。
一日にも満たない滞在時間ではあったが、この村ではいくつかの初めてを経験した。そのどれもが素晴らしく、ナーナルの心を満たしてくれた。この先も忘れることはないだろう。
「またいつか、足を運びたいものね……」
追われる心配もなく、のんびりと。
今日と同じく、隣にはエレンがいてくれたらいいな。
「お供いたします」
その想いを知ってか否か、エレンが同調する。
「ふふ、約束よ」
揺るぎない意志を感じる台詞を耳にして、ナーナルは柔らかな笑みを浮かべた。
やがて行商隊の許に戻った二人は、馬車へと乗り込む。それからしばらくすると、馬車はゆっくりと動き始めた。

第三章　港町ヤレド

外の世界は、実に広大だ。
王都という名の鳥籠の中に居たままでは、何も知らずに生きて死んだのだろう。
胸が高鳴る。次はどのような出会いがあるのだろうか。
……行商隊の馬車での旅は、お世辞にも快適と言えるものではなかった。
元々、人を運ぶためのものではなく、客席はない。積み荷と共に揺られて長時間の移動ともなると、体の節々やお尻が辛くなってくるのも仕方のないことだ。
しかしだ。それを上回る発見が、ここにはあった。
行商隊の人たちと言葉を交わすことで、外の世界の話を中心に、ナーナルは様々なことを教えてもらった。どのような経緯で行商人となったのか、故郷が恋しくならないのか、そんな身の上話から始まり、これまでに訪ねた国や町村で、特に印象に残ったお店や食べ物、風習など……
王都で生活しているだけでは知りえなかった世界を前に、ナーナルは興奮しっ放しだ。
忘れないようにと、耳にした話を手帳に書き残し、いつかその地を訪ねたとき、己の目で確かめようと心に決めた。
もちろん、言葉を交わせば話を振られることもある。

残念ながら、あまり深い話をすることはできなかった。痕跡を残し、ベルギスの耳に入れば、連れ戻される可能性があるからだ。

だが、そんな事情を持つナーナルたちにも行商人たちは優しく交流的だった。そのため、隣に座るエレンと共に、楽しく賑やかな時間を過ごすことができた。

ナイデン家にいた頃は、無駄口を叩くことを許されず、学園では貴族としての振る舞いを求められるため、ほとんどの生徒が心に仮面を付けていた。中には本当の顔を見せてくれる者もいたが、それもごく僅かな親しい友人だけだ。

一方で、ここにいる人たちは、ナーナルが貴族であることを知らない。

身分を隠していることに申し訳なさを感じてもいたが、それよりも顔色を窺わずに気さくに声をかけてくれることが嬉しく、時間を忘れて談笑に花を咲かせた。

「はあ……少し疲れたかも」

「二時間ほど経っておりますので、当然かと」

「えっ、そんなに……!? それも、いつもの冗談よね？」

嘘だろうと否定すると、エレンがローブの袖から懐中時計を取り出した。

横から覗き込んで針の位置を見てみると、確かに時間が進んでいた。

「エレン、ごめんなさいね？ こういうのってあまり慣れていなかったものだから、つい……」

「謝らないでください。ナーナル様の、あのように無邪気なお顔を見ることができて、私も楽しませていただきました」

エレンの返事に、ナーナルはホッと胸を撫で下ろす。

「ふふ、エレンと二人きりで外を旅するのも凄く刺激的だけれど、こうしてたくさんの人や荷物に囲まれながら旅をするというのも、何だかとても面白いものね」

これは一期一会の、ほんのひと時の出会いにすぎないかもしれない。

しかし、今までの味気ない生活よりも楽しくて記憶に残るものとなった。

「お話しなさった中で、何か気になることはございましたか？」

「そうね……ヤレドの話が興味深かったわ」

港町ヤレド。

二人を乗せた行商隊の馬車が向かうのは、ヤレドという名の大きな港町だ。

その名の通り、ヤレドは海沿いの、漁業が盛んな町である。波が穏やかで泳ぎやすく、観光地としても人気がある。屋台や食堂には新鮮な海の幸が用意されていて、美味しいと評判だ。

しかし、そんな中で最も人気なのは『喫茶店』だった。

行商人から聞いた話によれば、お洒落なものから庶民的なもの、会員制のものに隠れ家的なものなど、数え切れないほどの喫茶店が軒を連ねているらしい。あまりにも人気で、ヤレドが独自の喫茶本を発行するほどだ。

「喫茶店がたくさんあるだなんて素敵よね……王都では決まったところにしか行けなかったでしょう？ だから、時間さえあればすべての喫茶店にお邪魔してみたいわ」

「全店を制覇する頃には、お腹が膨れ上がっていますね」

「うっ、分かっているってば」
王都には、庶民お断りの喫茶店がある。味も接客も店内も、何もかもが整った空間だ。ナーナルが通っていたのも、そういう喫茶店だった。
しかしながら、逆に言えばナーナルは他の喫茶店を知らない。
まだ幼い頃、モモルの手を引いて別の喫茶店の前まで行ったこともあるが、結局はあと一歩のところで引き返してしまった。
だから、ヤレドにはどんな喫茶店があるのだろうかと憧れる。
「そうだわ。喫茶店の話をしていたら久しぶりにエレンの淹れた紅茶が飲みたくなったかも」
「ご所望とあらば」
話の流れでさらっと口にしたが、旅の途中なのだから飲めるはずがないことは分かっている。
なのに、エレンは了承した。
ナーナルが行商人たちと談笑する横で、エレンは会話の内容を記憶していたのだが、その中に茶葉の話があったのだ。
「次の休息時に隊長と交渉してみます」
「え、え？　……本当に飲めるの？」
「丁度、ナーナル様に紅茶を淹れて差し上げたいと思っていたところですので」
そう言って、エレンは口角を上げてみせた。

◇

程なくして、馬車が止まった。
休息に入ると、エレンはナーナルとの約束を守るため、早速とばかりに交渉に向かう。
隊長に訊ねたところ、行商隊が扱う茶葉の種類は十を超えていた。
実際に飲んだことのあるものから、名前も聞いたことのないものまで吟味する。
行商用の茶葉の中には、王都が産地のものもあった。これを選べば、慣れた味と香りを楽しむことができるだろう。
また、候補の中にはいくつかの香草茶もあった。
香り高いのが特徴であり、リラックス効果があるとされている。馬車での旅を続ける上で、心を休めることができるのは非常にありがたい。
だが、今回は別の茶葉を選ぶことにした。
「こちら、北方の国より仕入れた紅茶とのことです」
残念ながらティーカップはない。仕方なくコップに茶を淹れ、ナーナルに手渡す。
「北方の……ふうん、濃い目なのね」
コップを受け取り、ナーナルは香りを堪能する。
茶の色は濃く、味が気になるところだが……
「こちら、飲まれる前に口にお含みください」

紅茶と共にエレンが差し出したのは、ジャムとスプーンだ。
味を変えるものとして、砂糖そのものではなくジャムを用意したのだ。
直接入れたら、せっかくの熱さが損なわれてしまう。
そのため、ジャムを一口。
それこそが、この紅茶の楽しみ方だ。
「ジャムと一緒に……それじゃあ、いただくわ」
ナーナルはまずは一口、お茶そのものの味を確かめてみる。
エレンが淹れてくれた紅茶は、夜風に冷えた体を芯から温めた。鼻をくすぐる香りにも癖はなく、すんなりと受け入れることができる。
ただ、これだけでは物足りない気がする。
今度はジャムを口に含み、紅茶を飲む。
「んっ、……これは面白いわね」
すると、果実の甘さが絶妙に混ざり合い、味に変化をもたらした。
ジャムの量を変え、口に含む紅茶の量を変えて、その都度、変化を楽しむことができる。
だからか、ナーナルは面白いと口にした。
ジャムを用いた飲み方は、砂糖では表現することのできない独特な甘さを教えてくれる。
「……うん。とても美味しかったわ。ご馳走様、エレン」
少しして、紅茶を飲み終えたナーナルはエレンに感謝を告げた。

立ち読みサンプルはここまで

「ご満足いただけましたようで、なによりです」
「ええ。貴方のおかげで、また一つ素晴らしいものと出会うことができたわ」
初めての味は驚きに満ちていた。
だが、これで終わりではない。これから先の旅も、驚きの出会いが訪れるだろう。
エレンの声に、ナーナルは頬を緩めるのだった。

◇

数日後、二人を乗せた行商隊の馬車は、港町ヤレドに到着した。
少し離れた場所で馬車を降り、二人は隊長と握手を交わす。そのまま馬車の背を見送ってから、時間差でヤレドの町へ足を踏み入れた。
「潮の香り……ここがヤレドなのね」
視界いっぱいに広がる海。町全体を潮の香りが包み、波の音が自然と溶け込んでいる。
日の光を浴びた砂浜は宝石のように白く輝き、ここに来る者すべてを歓迎しているかのようだ。
馬車の中から遠目には見えていたが、ナーナルは改めて思う。
この町は、美しい。
「宿へ参りましょう」
見知らぬ町の風景に感嘆するナーナルをよそに、エレンが口を開く。